ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.10 October 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

10

CONTENTS

- 巻頭言
  “道”を伝える―求道と伝道
  ／堀内みどり 1
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（34）
  ニューヨークの日系人と天理教伝道 ⑤
  ／尾上貴行 2
- 日本語教育と海外伝道（15）
  日本語教育での教授法について ②
  ／大内泰夫 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（13）
  悪魔的なもの―人間倫理の無力さと救い
  ／金子　昭 4
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（19）
  仏典翻訳の歴史とその変遷 ②
  ／成田道広 5
- ライシテと天理教のフランス布教（19）
  ライシテと医療 ④
  ／藤原理人 6
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（6）
  2. コロンビアにおける日本人移民の話―その 1
  ／清水直太郎 7
- 遺跡からのメッセージ（50）
  弥生時代を再考する ④ 土井ヶ浜遺跡と渡来人論
  ／桑原久男 8
- ヴァチカン便り（40）
  個人主義に冒されるキリスト教徒
  ／山口英雄 9
- 思案・試案・私案
  天大生の SDGs に関する意識調査 ①
  ／佐藤孝則 10
- おやさと研究所ニュース 11

  第 324 回研究報告会（堀内みどり）／「国際比較神学会議 2019（International Conference of Comparative Theology 2019）」に参加して（澤井真）／2019 年度第 1 回伝道研究会（三浦尚仁）／2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

“道”を伝える―求道と伝道

おやさと研究所主任　堀内みどり　*Midori Horiuchi*

８月７日、本年度第１回の「伝道研究会」がありました。これは研究所の研究活動の一環として、不定期的に行っているものです。今回は、アフリカにおける「世界救世教いづのめ教団」（教祖は岡田茂吉。以下、救世教）の様子を現地でフィールドワークをされている三浦尚仁さんに伺う研究会となりました（「おや研ニュース」の項の要約参照）。

三浦さんによると、救世教は、1955 年（昭和 30）からブラジル布教に着手し、そこで信徒となった人が、同じポルトガル語圏であるアンゴラでの布教を 1991 年（平成３）に始めました。そして、今では 60,000 人を超える人びとが信徒となっているということです。三浦さんは、日本から直接布教を始めたのではなく、同じポルトガル語圏のブラジルを通して布教が展開されたことが、まず、重要ではないかと指摘されています。また、しばしば行われる信徒の体験談発表が、信徒一人ひとりを自らの信仰の原点に立ち返らせ、それを発表するという過程で、信徒の信仰そのものが深化し定着し、そうした「語り」の積み重ねによって「日系宗教」という文化的枠組みを超えていっているのではないかとも指摘されました。

自分がたすけられた体験が自らの信仰を形成していく元になっているということでしょう。

「おさしづ」は、

尋ねる時の心というは、いつ〳〵生涯定めると言うなれど、速やかなれば、事情日が経ち、月が経ち、つい〳〵忘れる。（明治 28 年５月 28 日）

と諭し、また、

一寸聞く。聞けば当分一時の処に治まる。なれど日が経ち、月が経てば忘れる。めん〳〵勝手、めん〳〵の理、事情で皆忘れる。（明治 25 年５月 14 日夜７時 40 分）

とも教えられます。たすけられた時のその心は日々の生活の中で“忘れてしまいがち”であるなら、その時のことを繰り返し“話す”ということは非常に大切なことだと思われます。

ところで、『天理教教祖伝逸話篇』は、次のような逸話を伝えています。

大和国神戸（かんべ）村の小西定吉は、人の倍も仕事をする程の働き者であったが、ふとした事から胸を病み、医者にも不治と宣告され、世をはかなみながら日を過ごしていた。又、妻イヱも、お産の重い方であったが、その頃二人目の子を妊娠中であった。（100「人を救けるのやで」）

教祖によって定吉はたすけられ、また、イヱも無事に出産することができました。定吉は、その恩をどうしたら返すことができるのでしょうかと、教祖に尋ねます。教祖は、

「人を救けるのやで。」

と、仰せられた。それで、「どうしたら、人さんが救かりますか。」と、お尋ねすると、教祖は、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

と教えられました。真剣に自分の「救かった」話を伝えること、それは「はぁと思たる芯の心忘れるに忘られん。」（明治 33 年 10 月７日補）という、その人の信仰の元そのものです。こうして、自分のたすかりを伝えていくことが、自他共にたすかっていく・たすけられていくことになっています。

人を救けるというは、互い〳〵の真の誠の理が人を救ける。又我が身も救かる救かる。（明治 21 年 10 月 16 日補）

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ⑤

おやさと研究所講師
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

ニューヨーク天理文化協会の活動と展開

1991 年 2 月、ニューヨーク社会との接点としてニューヨーク天理文化協会（Tenrikyo Cultural Institute、以下 TCI）が設立された。TCI は、文化活動を行っている非営利団体である。文化を理解し、文化的な調和と文化的コミュニティ形成を目指して、日本語教室、ギャラリー、コンサートなどの活動を行っている。TCI の位置するグリニッジ・ヴィレッジは芸術家、作家などの文化人が多く集まり、また大学も近くにあるなど、文化活動を行うのに適した場所となっている。以下、主な活動をみていく。

日本語学校

1991 年の設立以来、日本語学校は、TCI の主要な活動として運営されている。日本語学校設置の背景には、1980 年代の日本語ブームがあり、また日米の政治的・経済的な影響も大きかった。大人クラスは、平日の夜間と随時週末に行われている。生徒は、ヨーロッパ、アジア、中東、中南米などさまざまな国の人々である。またニューヨーク社会の多様性を反映して、その職業も学生、会社員、画家、音楽家、弁護士、モデル、国連スタッフなどとなっている。開講以来、現在までに 2,000 人以上が受講し、近年では常に 100 人ほどの学生が学んでいる。

2016 年に行われた受講生へのアンケート結果によると、日本語を学ぶ理由としては、日本文化への興味、日本人とのコミュニケーション・スキルを身につける、日本への旅行、仕事・職探しなどが上位を占めていた。日本人とのコミュニケーション・スキルを身につけると答えた人は、配偶者や家族が日本人や日系人である場合が多かった。また日本について興味があるものとして、上位にあがったものは文化、食べ物、マンガ・アニメなどであり、他にファッション、芸術、建築などニューヨーク社会を反映していると思われるような事柄も興味の対象としてあがっている。

日本語教育の新たな活動として、2002 年には子供のクラスが開講され、以来外国語としての日本語教育と日本人子弟のための国語教育の 2 つが行われている。現在 100 人以上の子供たちが学んでいる。多くの子供たちが日本語を学ぶ背景には、日本のアニメやゲームの流行にあいまって、日本語に関心をもち、学習を希望する子供が増えてきていること、またニューヨークに在住する日本人の子弟への日本語教育への需要の高まりなどがあげられる。

ギャラリー

TCI の 1 階のオープン・スペースは、ギャラリーとして展示会に利用されている。現在では年間 10 回以上の展示会が開催され、プロからアマチュアまで多様な芸術家により、絵画や彫刻などが展示されている。開設から最初の 10 年ほどは、広告や人的ネットワークなどさまざまな手段を通じて展示を行うアーティストを探していたが、近年では口コミで存在が知られるようになり、積極的なプロモーションをせずとも、ギャラリー利用の問い合わせなどが増えている。ニューヨーク日本人美術協会主催の展示会など、定期的に開催されているものもある。

近年、ロシアや台湾などの美術館による展示会も開催された。来場者は展示会の内容によりさまざまであり、一般のアメリカ市民の来場はもとより、日本人関係の展示の場合には日系人、日系企業、日本国総領事館の関係者が、またロシア関係の展示には、ロシア人や在ニューヨークロシア大使館の関係者などが来館するなどの特徴がみられる。

パフォーミング・アート

現在、年間 100 回以上のコンサートやパフォーマンスが行われている。クラシック音楽が主流であるが、ジャズ、ニューミュージック、また雅楽などの邦楽の演奏会も行われている。ギャラリーでの展示と同様に、アマチュアや若い芸術家の発表の場としても活用されている。近隣の大学も定期的にコンサートを行っている。多くの音楽家が集まるニューヨークでは、若い人々の発表の場が少なく、TCI では社会貢献の一環として現地の要望に応えている。また音楽における新しい試みも行われており、クラリネット演奏を軸とした「和シリーズ」ではフェイスブックのストリーミングを活用して世界中へ演奏を発信している。

パフォーミング・アートも多様なアーティストにより行われている。定期的に開催されるものの一つに、日本の伝統芸能への理解を深めてもらうことを趣旨とした「さろんシリーズ」があり、日本の舞踏、演劇、音楽などが公演され、質疑応答や意見交換フォーラムなども行われている。TCI は『Time Out New York』などのニューヨーク現地誌にもギャラリー・コンサート会場として紹介されており、ニューヨーク社会の文化活動施設としてその存在は定着している。

他団体との交流、インターンシップなど

TCI では、設立当初から地域社会や他団体との交流を進めており、コロンビア大学、ニューヨーク大学、国際交流基金、アジアソサエティなどとさまざまな形での協力関係を構築している。2005 年に開催された『ニューヨーク移民歴史週間』では、日本文化として「バレエと和太鼓」のパフォーマンスを行い、期間中にニューヨーク市長公邸に TCI スタッフが招待され市長と面談するなど、ニューヨーク市との関係を深めるきっかけとなった。

また、日系人会や県人会の会合などでも利用されている。近年では、青森県人会による「青森ウィーク」という催し物で、ねぶた、篠笛の演奏や物産展が行われ、年配の日系人によって開催された「コミュニティ・カフェ」では、在住 40 ～ 50 年という人々が集まり交流を深めた。ニューヨーク在住の人々や学生などに、ボランティアやインターンの機会も提供している。

さらに天理大学との学術提携、多摩産業大学交遊会による展示会、東京芸術大学による芸術ウィーク、フランスの天理日仏文化協会など、他国の大学や文化施設との協力関係も構築している。2010 年に結ばれた天理大学との学術提携により、留学生の相互受け入れを開始し、天理大学生をインターンとして受け入れている。また TCI の日本語教室の学生が、夏期休暇の時期に日本を訪れ、天理大学の夏期日本語講座で学び、他国からの学生との交流を行っている。日本語教育に長い歴史を持つ天理日仏文化協会からは、ニューヨークに日本語教師が来訪し、TCI での短期日本語教師養成講座の講師などをつとめている。

日本語教育での教授法について ②

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

LL 活用上の課題

LL（Language Laboratory）が始まった頃の話は前回述べた。筆者も LL を使って外国語を学び、後に LL を使って日本語を教えることになるのだが、この LL を活用する上でいくつかの課題もあったように思う。LL は文型を繰り返して練習し、定着させるのに有効な機器ではあるが、学習者が意味を考えずに、ただ文を繰り返したり、機械的に動詞の活用をさせたりする側面があった。言い換えれば、正確な文を発話させることに主眼がおかれていたのである。そのほかにも、文の構造を絶えず意識させ、コミュニケーションのための練習とはなりにくい側面もあった。

天理大学別科勤務時代のエピソードを紹介する。１年間の学習を終え、２年目に入り、留学生たちは寮を出て、市内のそれぞれの所属教会の詰所へ移った頃の話だが、「学校では先生の日本語がよくわかるけど、詰所で日本人の話す日本語がわからない、習った日本語が使えない」と言われたことがある。詰所では関西弁の人もいれば、地方の方言話者もいるであろうし、学校で標準的な日本語を習っていることを考えると、無理のないことだとも思うが、今振り返ってみれば、そうしたこと以上に、当時の教授法が原因していたのではないだろうか。

また別のエピソードだが、授業での自由な質疑応答の時間、ある学生が答えを考えている時に別の学生が「チャカ！」と言った。すると、クラス中が笑いに包まれた。筆者は何のことかわからず、尋ねてみると「チャカ！」というのは、LL 教室で学習者が発話した音声を録音する際、テープを自動で録音・停止させるキュー信号のことであった。このキュー信号によって機器は制御されているが、録音・停止する時に「ガチャ！」と音がする。その学生は韓国人だったのだが、「チャカ！」と聞こえていたようだ。擬態語の面でも興味深いことだが、それはともかく、この音はリピート練習、代入練習、変換練習などの際に LL のテープ教材の中に入っているキュー信号によって、カセットテープを制御する際に発生する音のことだった。つまり決まった長さのポーズの間に学生は答えなければならないわけで、それを皮肉ったわけである。笑い話のようだが、これは教授法を考える上で大事なことであったように思う。実際のコミュニケーションの場では発話する時間が制限されることはなく、また答え方も様々である。あるいは言葉を発せず表情で応えることもある。現実のコミュニケーションとは違うことを練習や試験で行っているわけだが、筆者も文型を間違わずに正確に作り出す訓練を積み重ねていけば、しゃべれるようになると信じて授業を行っていたのであった。この時の反省から後の「コミュニカティブ・アプローチ」の研究に続いていったのである。

どうして機械を取り入れるのか

語学教育にどうして LL 機器のような機械が導入されるのか。筆者は、語学教育に機械を介在させる意義は、教師による学習活動ではできないことを可能にしてくれるから、機械を介在させるのだと考えている。LL 機器には様々なメリットがあるのは周知のことだが、機械である以上、人間のように臨機応変な対応をすることはできない。したがって、生身の教師でなければ対応ができない部分は生身の教師が担当し、機械に頼らなければできない部分は機械が担っていくことが自然ではないだろうか。LL 機器は、ネイティブスピーカーの発音を繰り返して聞いたり、少しまとまった内容の話を聞き取ったりするヒアリングの練習や文型のドリルを行うのに有効である。また LL 機器を導入することで、素早く反応する訓練もでき、直感的に文をとらえる習慣も身についていく。さらに、LL 教室では、学習者はどこに座っていても、同じようにはっきりと音声を聞くことができる利点もある。その反面、音声のみで機械的に文法項目の活用を練習させるドリルなどは、場面や意味などを思い浮かべずに習ったとおりの文法規則を当てはめて変化させるだけで、活用の練習にはなっても実用的とは感じられず、学習意欲をかきたてるようなものとは言えない部分もある。機械は万能ではなく、導入する際には留意しなければならないことも多いのである。

教授法のパラダイムシフト

LL に関する筆者の体験を紹介したが、そうした経験があったからこそ、教授法に関しても研究し、よりよき授業になるようコミュニカティブな活動も取り入れることができたのである。その結果、授業内容は改善していった。日本語教育において 1980 年代は大きな変化のあった時代であることは以前にも書いたが、教授法においてもパラダイムシフトがあった時代である。この時期は、オーディオリンガル法からコミュニカティブ・アプローチへという流れで、授業法改善の研究が進んだ時代であった。日本語教育の研修会に出かけても、コミュニカティブ・アプローチの実践例の発表などがしばしばあった。またアルク社が発行していた日本語教育の雑誌『月刊日本語』にも、コミュニカティブ・アプローチに関する多くの記事が載っていた。時代の流れがそうだったのかもしれないが、従来のオーディオリンガル法ではだめだ、これからはコミュニカティブ・アプローチの時代だという風潮さえあったように感じている。

「教授法の比較」

	オーディオリンガル法	コミュニカティブ・アプローチ
発音	母語話者なみの正確さ	母語話者に理解可能な程度
目指すもの	正確さ	流暢さ
重視するもの	音を通じた「型」語彙の習得	コミュニケーション能力
誤り	避けるべきもの	修得過程に生じるもの
中心	指導者	学習者

それまでは、アメリカの構造言語学が行動心理学の影響を受け、言語学習というものは、機械的な口頭練習によって習慣形成するという考え方が主流であり、そう信じて授業を行っていた教師も実際に数多くいた。しかし、日本語教育の現場で教えている多くの教師の中には、実際の授業の現場経験から疑問をもつ教師も現れて、大きな論争にもなったのであった。当時、日本語教育センター主任であった渡辺治則・天理教語学院前校長とも、よくこのことについて話し合った。どちらか一方を完全否定するのではなく、それぞれの長所は長所と認め、短所を補うように授業を組み立てていけばいいのであって、現在もそうしている日本語教育機関は多いのではないだろうか。その後、90 年代後半からはパソコンが普及し、語学教育へも積極的に利用される時代に入っていく。

悪魔的なもの―人間倫理の無力さと救い

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

鷗外の「高瀬舟」と芥川の「疑惑」

森鷗外の小説「高瀬舟」（大正５年）は、生命倫理で安楽死の問題を取り上げる際に、よく話の枕として引き合いに出される。ある役人が京都からの罪人を護送する高瀬舟の中で、弟殺しの罪で遠島になった若い男に話を聴くという内容である。不治の病で余命いくばくもないと覚った弟が、剃刀で自分の喉をかき切って自殺しようとする。しかしそれが果たせずに大変な苦しみの中にいる。その現場を見た兄は、早く楽にしてやろうと自ら剃刀を取って弟を殺してしまう。血族殺しは重罪であるが、そのような切迫した状況が情状酌量されて、兄は遠島の判決を受けたのである。役人に自らの罪と罰を語るその男の顔は、なんの屈託もなく晴れやかであった。

「高瀬舟」とほぼ同じテーマを扱った小説に、芥川龍之介の「疑惑」（大正８年）がある。こちらのほうは、読む者に陰惨な印象を与える。実践倫理学の教師が地方に講演に来た際、一人の中年の男から妻殺しの顛末を聴くという内容である。その男は結婚間もない若い頃、濃尾地震のために、妻と共に倒壊した家の下敷きになったという。夫はかろうじて助かったが、妻は下半身を梁の下に挟まれ、動けなくなってしまった。そうこうするうちに火の手が迫ってくる。夫は、妻が苦しい思いをして焼け死ぬよりは、いっそのこと早く楽にしてやろうと、屋根瓦で妻を殴打して殺してしまう。ところが、彼は実は心の底で妻を憎んでもいたのである。もしかしたら、その憎しみがあって、妻をそのように殺害してしまったのではないか。夫はそのことをだれにも言えないまま、心の苦しみにたえず苛まれつづけた。しかし、再婚相手との結婚式の場で、花嫁を前にして恐怖に駆られ、ついに「私は人殺しです」と叫んでしまう。その日を境に、彼は人々から狂人扱いされることになった。

倫理学の範疇を超える問題

「高瀬舟」における弟殺しの兄は、確かに法的には罪を犯した。だが、それはあくまで、非常な苦痛を避けるためにやむを得ずやったまでのことだ。彼は良心の疾しさをなんら感じていない。その晴れやかな顔が何よりの証拠である。たとえ死罪が言い渡されても、彼は慫慂（しょうよう）と服したことであろう。ここでの問題は安楽死をめぐる法理と倫理の関係に絞られ、それは十分倫理学の論議となる。

一方、「疑惑」における妻殺しの夫が苦しんだのは、まさに良心の呵責であった。彼が「私が手にかけて殺しました」と口外したからといって、重罪を科せられるわけでもない。あるいは、そのことによっていっそう同情が集まったかもしれない。それほどの限界状況だったのだ。しかし、彼は心中で妻を憎んでいた。そして、その憎しみが大地震を利用して妻の殺害に至らしめたのかもしれなかった。この恐ろしい思いが彼を地獄のように責め苛んだのである。問題は安楽死をめぐる生命倫理的是非にはもはやない。いや、それどころか、通常の倫理学の範疇をすら超えてしまっている。

文学作品として見れば、「高瀬舟」よりも「疑惑」のほうがはるかに優れている。底知れぬ人間悪の深層に迫ろうとしている点で、何と言っても芥川龍之介は、我が国の近代文学作家の中では一頭地を抜いていると言えよう。

狂気と悪魔的なもの

「疑惑」における夫が人々から狂人という烙印を押されたのは、そのようにするしか、正常な人々の生活世界、すなわち人間倫理の世界では対処できないからである。だが、この夫が陥った状況というのは、いつ何時だれにでも起こり得るものだと言えないだろうか。小市民的な暮らしを送っていた者が、突如としてどうにもならぬ事態に巻き込まれ、思いもよらぬことを引き起こしてしまう。彼は、自分を狂人にしてしまったのは、どの人間の心の底に潜んでいる怪物のせいではなかったかと語る。その意味で、だれもがいつ狂人の仲間入りをしないとも限らないのである。

通常の倫理学は、そのような怪物を相手にできない。怪物を扱うことができるのは、人間の悪の深層を捉える実存の哲学である。キルケゴールは『不安の概念』の中でこれを取り上げた。彼はこの怪物を悪魔的（デモーニッシュ）なもの det Dæmoniske（das Dämonische, the demonic）と名付けた。悪魔的なものは善に対する不安である。ここでいう善とは、単なる道徳的な善のことではなく、自由の回復やそれによる救いのことを指す。そのような善を前にして悪魔的なものは、自らを閉じ込める閉鎖性、不自由さとして突発的に現われる。しかし、この閉鎖性というものは心ならずとも開かれていくものなのだ。それが可能になるのは、不自由の根底にある人間の根源的な自由が交わりを求めて、不自由の殻を突き破るからである。

「疑惑」における夫の姿は、まさに悪魔的なものの特徴を示しているものであった。自分の良心の呵責や犯した罪に耐えきれず、彼はついにそれを口にせざるを得なかった。そこに、悪魔的なものの相貌を垣間見ることができる。だが、それは同時に悪魔的なものを突破する契機にもなりうるのである。キルケゴールは、その様子は「夢遊病者が名前を呼ばれると目が覚めるのに似ている」と形容している。

このことは、「疑惑」を再読してみればよく分かると思う。夫が自らの「罪」を告白したのは２回あった。１回目は、再婚相手の花嫁の面前で「私は人殺しです」と叫んだときである。この時は彼の中の怪物が荒れ狂い、それがそのまま彼の言動に現われてしまった。そのため、人々は彼を狂人と名指さざるを得ないものとなった。２回目は、実践倫理学者の前で、これまでの顛末の一部始終を語ったときで、これが小説の本体をなしている。そのときまでには、彼の内なる怪物―悪魔的なもの―は白日の下に曝（さら）されてしまっていた。そして、この話を語るに値すると見なした実践倫理学者に、彼はその恐ろしい状況と心の内を淡々と物語る。倫理学者は彼の話に何も答えない。答えることができないのである。それほどまでに恐ろしい人間心理の暗部なのである。

だが、物語る彼のほうは、このときすでに救済のとば口のところまで来ていたと言えるのではないだろうか。というのも、まさに彼が自らの自由の力によって、閉鎖性と不自由さを打ち破っていたからで、だからこそ彼はその恐ろしい物語を語ることができたのである。彼は決して狂人ではなかった。彼はただ悪魔的（デモーニッシュ）なものに囚われていたのである。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ②

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

書写仏典の誕生と大乗仏教

現存最古の仏典写本はガンダーラで発見されており、その時期は紀元前後と推定されている。カローシュティ文字で書写されたそれらの写本の研究から、仏典書写の開始時期もその頃であったと推定されている。

マウリヤ朝アショーカ王の保護政策によって、仏教は教勢を拡大し、紀元前１世紀ごろになると、出家教団は次第に組織化され、その経済基盤も強固になりつつあった。在家信徒からの布施の一部は預金され、その利子が教団の定期的な収入となり、また、教団が所有する農地も安定した収入源となっていった。その結果、僧院は規模を拡大させ、その数も増え、布教の旅を続けていた出家者は次第に僧院に定住するようになっていった。このような出家者の生活様式の変化は、教えの伝承方法にも影響を及ぼしたと考えられる。出家者が遊行していた時は、書写されたものを持ち運び、教えを伝達するという方法は非現実的であった。やはり教えを記憶し口伝によって布教するという方法が一番効率的であったに違いない。しかし遊行生活を捨て、定住生活を送る段階においては、書写された典籍を維持管理することが容易となり、書写による仏典製作が始まったのではないかと考えられる。ナーランダーやヴィクラマシーラといった規模の大きな僧院が教理の研究機関として機能しはじめると、千人を超える学徒が教えの学問的な研究に没頭した。そのような状況においては、書写された典籍を自由に閲覧し研究することが求められた。口頭伝承から書写への流れは仏教史においては必然であったのかもしれない。

当然ながら口伝の場合、伝承の内容は伝達者という「人」に完全に依拠することになる。伝承内容の媒体はあくまで「人」であるので、伝達者に対する信頼が伝承内容の信憑性に直結する。しかし、書写された場合は、書写されたものそのものが伝承内容の媒体となる。その経典をだれが製作しようが、だれが朗誦しようが、あくまでも「テクスト」が伝承の媒体となる。この「人」から「テクスト」への媒体変化は、仏教史において新たな問題を提起することになった。それは、経典の内容が真に釈迦の教えなのかどうかという、それまで想起されていなかった新たな問いである。このような正統性への問いは口伝の場合成立しえない。なぜなら、口伝では、師の言葉を疑う行為そのものが伝承という伝統を破壊するからである。書写テクストの誕生、つまり、経の伝承内容が「人」から遊離した時点から、それ自身の正統性をどのように確保するのかという問題が生まれた。そのような正統性の確保には、既存の経典の次に新たに経典を製作するという方法が採られた。ある経典の正統性を証明するためには、それを担保するための新たな経典が必要となり、結果的に経典が経典を生み出すという連続的な運動が始まることになったのである。そのような連続した運動にこそ、経典の正統性が持続的に刷新されたので、一連の経典製作運動は匿名の経典製作者らによる連続的な営みとなっていった。

部派仏教の時代において、教団内で教えの正統性を議論する場合、その構図は「人」対「人」であった。しかし書写経典が出現してからは、その正統性の議論は「人」対「テクスト」の構図において展開されるようになっていった。

この「人」対「テクスト」という構図を考えると、やはり伝達者である「人」は「テクスト」と比較するとはるかに有限である。当然ながら後世にまで残るのは「人」ではなく書写された「テクスト」ということになる。そして、その「テクスト」は伝承者を必要としない自立したものとして存在し続けることになり、経典製作という不断の営みによって更にその正統性を獲得していくことになった。

このような経典製作運動と大乗仏典の誕生は密接に関係している。

> 伝統仏教の経蔵の編纂活動が閉じ、その内容が固定すると同時に、仏説をめぐる思想的いとなみは経蔵の分析的思考力と体系的構成力を有する論蔵の担い手たちのもとに集約され、仏説の術語の詳細な分析、相互関係の整理、その体系化へと関心が移行していった。そうしたなかにあって、ほとんど形成活動が閉じた経蔵を担うものたちの一部に、ブッダのことばが書写経典のうちに存在することの重大な意義を洞見し、真の仏説への問いと経典の存在意義とをともに担うものが出現した。すなわち大乗経典出現の起源は伝統経典の担い手たち、つまり経師たちのもとにある。（下田，2011: 58）

インドにおける口頭伝承では、その伝承内容がほとんど変容することなく受け継がれていた。これは、バラモンによるヴェーダの伝承からも明らかである。口伝の過程で若干の変化はあるものの、大幅な変容や新たな思想が入り込む余地はインドにおける口頭伝承において一般的には認められない。しかし、大乗仏教の思想においては、以前には全く説かれていなかった「六波羅蜜」などの新たな思想や、「空」や「縁起」、「菩薩」などの伝統教理の敷衍的解釈が展開されている。大乗の教理のようなかなり異なった要素が取り込まれていく過程には、やはり、個々人の閃きや新たな発想が反映される必要があり、おそらく教団などの組織的な口伝の伝統ではない、書写という伝承方法が前提となったのではないかと下田は指摘している。さらにその経典製作運動が始まると、それらの経典では、次第に経典書写の功徳も積極的に説かれるようになっていった。大乗仏典の誕生には、伝統教団内における上述の伝承方法の変化と、「テクスト」の背後に隠れた匿名の経師たちの存在が関係していたと考えられる。

このように、経典が経典を生み、その結果、大乗においては多種多様で膨大な量の経典が生みだされることとなった。その内容が教理的変容を醸成し、書写経典は拡散していった。

伝統教団内において、経師たちは経のことばに没入し、その中に自身の宗教的閃きや信仰的発露としての新たな解釈を残しつつ、現実世界に舞い戻り、文字化の過程で自己の痕跡を消しさる営為を繰り返した。そして彼らは大乗仏典という新たな「テクスト」を生み出し続けた。その結果、「テクスト」の外で展開されていた仏教の諸々の活動の一部が「テクスト」に倣（なら）って是正され、集約されていった。それらを包摂しながらまったく異質で新しい複合的概念として展開、組織化していったものが、後に大乗仏教と呼ばれるに至ったと考えられる。

［引用文献］
下田正弘「経典を創出する―大乗世界の出現」高崎直道監修『シリーズ大乗仏教２ 大乗仏教の誕生』春秋社、2011 年。

ライシテと医療④

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

今回は、イザベル・レヴィ女史の著作『病院に対する宗教の脅威』から、信仰が医療現場で問題になった事例を紹介してみたいと思う。著者は、もちろん公立病院では信仰は尊重されるものの、最善の治療方法が優先されるという意見をこの本で繰り返しているが、今回は彼女の意見を紹介するよりも、具体的な事例を抽出してみたい。またこれらは一部の特殊な例ではないとも述べられている。

—老人ホームの施設内にカトリックのミサの案内が過剰に置かれている。(p. 26)

—リハビリテーション科の看護師が、カトリック以外の聖職者を病院に呼ぶことを拒否。(pp. 29-30)

—ユダヤ教信者が病室でろうそくをつけてお祈り。注意するも聞かず、二度目に発見したときに慌てて消そうとして発火。(p. 43)

—カトリックの病院司祭は給付金があるが、他宗の場合必ずしもそうではない。(p. 44)

—看護チームの人数が足りない中、ある看護師が患者の世話をせず祈祷行為を行う。(p. 57)

—熱心な信者である看護師が、動けない老人のそばで安らかにあの世に行けるよう祈る。(p. 63)

—1998 年イスラムの厳格な信者である夫に連れられた女性が出産のため来院。宗教的な理由で男性医師による帝王切開を拒む夫の説得に時間がかかり、結局帝王切開もできず、難産の結果子供に重い障害が残った。のちに夫婦は病院を相手に、帝王切開を行わなかった、夫を制するのに警察を呼ばなかったことを理由に裁判を起こしたが、敗訴した。(p. 109)

—歯が痛む女性の検査のため夫婦で来院。夫が妻のヴェールを脱がすことを拒否。病院側の説得を聞かず治療を受けずに病院を出た。その間女性は一言も発さなかった。(p. 114)

—女性医師がブルカを被った女性を診断。指にリンパ結節腫の疑いがあるためより精査な検査が必要であったが、同伴していた夫が拒否。女性は夫に連れられ無言のまま病院を去った。(p. 115)

—妊娠四か月の女性が夫と来院。出血していたが、夫が診察を拒否し、薬の処方箋だけを要求。症状がわからないと処方箋も出せないと言うと、そのまま二人で病院を出た。(p. 116)

—意識不明の子供が輸血をうけたが、エホバの証人の信者の親はその子を迎えに来ず育児放棄した。ただし、エホバの証人全国評議会によるとこの親の態度は容認されない。(pp. 121-128)

—インド系の患者が心臓移植を受けた。順調であったが、自分の心臓をまた戻してほしいと診察のたびに言うようになった。西洋人には分かりにくいことだろうが、自分の魂と移植した心臓の人の魂とが体内で絶えず争っているとのこと。(p. 138)

—あるラビ（ユダヤ教祭司）によると、特定の病院ではコーシャー（ユダヤの律法に叶った食品）のパック食品を買うこともあれば、家族やユダヤ系団体が持ち込んだ食事を院内の冷蔵庫で保管することもある。これに対し、著者は病院の衛生管理や運営、治療面でこういったことは受け入れられないと述べている。(pp. 175-178)

—授乳できない身体状態のユダヤ系の母親が、コーシャーではない哺乳瓶を使うことを拒否。そこで看護師は乳児に点滴を使用。著者は親も看護師も問題ありと断じている。(p. 185)

—イラン人患者に豚肉を給仕。看護師は謝罪したが、その豚肉を今度はミキサーにかけてピューレにした。患者はわからずに口にしてしまった。別の看護師はイスラムの患者と知ったうえで豚肉を勧めていた。病院側に信教の自由を保障できる条件が整っていても、それを尊重しない場合もある。(pp. 186-187)

別の問題として、健康保険も挙げられている。伝統的な理由から、結婚に際し処女膜再生手術を受ける女性が少なからずいる。本来は治療目的がないと保険適用外だが、施術名をごまかすなどして公立病院で手術が行われ、保険が適用されることもあるという（pp. 144-152）。また包茎治療の手術であれば100％保険が適用されるが、宗教的な割礼はそれに該当しない。しかし、表向きの理由を黙認し、手術を行う公立病院もある。

女子割礼は 1994 年以来フランスでは法律で禁止されているが、以下のような例もある。

—アフリカ出身の女性の出産に際し、陰部縫合が見られたため、外科医が抜糸し出産を無事に終えた。しかし母となった女性がまた以前のように縫合してほしいと懇願し、その伝統を尊重するという立場から医師が看護師の反対を押し切って再縫合した。フランスで陰部縫合が行われたことが法の裁きを受ける可能性がある。(pp. 164-166)

必ずしも宗教に否定的な問題ばかりではない。カトリックもユダヤ教もイスラム教も人命が最優先され、命にかかわる場合ハラルではない薬の使用も正当化されるし（p. 83）、コーシャー薬品で対応できない場合は指定リストにない薬品も使用可能である(p. 89)。医療器具がラビの責任下で作られなかったからと非経口投与を拒否するも、ラビの説得でそれを受け入れた家族の例もある（p. 185）。また、アフリカ出身の女性が、自身の命も危ないと医師に堕胎を勧められるも、宗教が子供を産めと教えているからと受け入れなかった。医師がパリモスクに電話で相談したところ、即座に評議員を集め合議し、一時間後にファックスを送付。そこには、イスラムでは母体が危険な状態にあるとき、母の命は子供の命より優先されるとあり、この女性も堕胎を受け入れた（p. 120）。またエホバの証人の指導者が信者である患者を訪問した際、病院長がそれに反対し裁判になった。布教活動をするわけでもなく、治療に反する行為も行っていないため、病院側の訪問拒否は違法とされた（p. 46）。また先にエホバの証人の信者が輸血を受けた子を手放した例を挙げたが、逆に親が医師にすべてを託し暗黙のうちに必要な医療処置を受け入れた例も挙げられている（pp. 121-128）。フランスでは未成年の病人や判断力のない大人を助ける手段が限定される場合、法律により医師の判断が最優先される。

近代的な医療を受ける妨げになるのは、宗教によるのか、あるいはそこから派生し根付いた伝統によるのか、その境界が見えにくい時も多々あると思われるが、次回は同じ筆者の著作から宗教の教えのどういった部分が根拠になって医療行為と相反するのか、という点を見てみたいと思う。

［参考文献］

LEVY Isabelle, *Menaces religieuses sur l'hôpital*, Presse de la Renaissance, Paris, 2011.

2. コロンビアにおける日本人移民の話―その 1

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

コロンビア以外の中南米における日本人移民は、多くの研究がある。ここで扱うのは、あまり取り上げられることのないコロンビアの日本人移民についてである。コロンビアには南部（エクアドルに近い方）と北部（カリブ海側）の二つの地域に日本人の移民が行われ、二つの地域には公式･非公式の「日系人会」が存在する。

2.1 コロンビア南部の日本移民

コロンビアの日本移民は、他の南米の国（ブラジル、ペルー、パラグアイ、アルゼンチンなど）に比べ、小規模で少数である。よく知られているのは南部のカウカ県やバージェデルカウカ県の農業移民である。これらは今まで研究されており、資料も少なからず存在する。現在でも多くの人は、コロンビアの日系人とはカリ市やパルミラ市在住の人々のことだと言う。カリ市やパルミラ市の以前はカウカ県のコリント町が発祥である。そして日本人移民や日系人は「農業の専門家」として成功をおさめ、1951 年に農業日本人会（S.A.J.A）が結成された。

＊日本人の移住計画

コロンビアへの移住計画は外務省が大正 15 年（1926）パナマ領事とペルー公使の要請により調査開始。その結果、昭和４年（1929）にカウカ県、コリント地区ハグアル町に土地を入手、日本人を派遣することになった。

第１次入植者：日本では、ブラジルへの移住が盛んであった時期で、海外興業会社が全国に募集をかけ、５家族 25 名が第１次移住者として渡航した。昭和４年（1929）10 月７日横浜港発。11 月 16 日ブエナベントゥラ港に到着、18 日に入植した。

第２次入植者：前回の広範囲の募集から、３家族が応募した福岡県に絞り、その代理店を通じて、これ以降福岡県がコロンビア移住の中心派遣地域となる。第２次入植者は５家族 34 名(後に田中正男氏の弟隆義が合流）が、昭和５年（1930）３月 14 日横浜港発、4 月 20 日ブエナベントゥラ港着、21 日移住地到着。

第３次入植者：昭和 10 年（1935）９月 22 日に横浜港発、10 月 26 日にブエナベントゥラ着、10 家族 100 名だが、形式結婚や形式養子縁組、合成家族があり、入植後４家族が独立した。14 家族と歴史書には記されている。

第１次から第３次まで合計 164 名がコロンビアに移住したことになる。家族数では合計 24 家族である。そのうち何家族かは、ブラジルに行くつもりがコロンビアになったと記録されている。[1]

＊日系人協会の存在と機能

日系人協会は今年（2019 年）10 月 19 日に移住 90 年記念の祭典を行う予定である。かつて同協会の方向性を決める際、ある移民二世が興味深いことを述べた。「私たち日系人は日本人の親を持つが、どこまで日本の事を知っているかわからない。日本語も出来ないし、習慣もわからない。私の妻は日本人ではない。日本人であることの長所は何なのだろうか。そういう意味で日系人協会の存在が極めて重要なのです。」

＊現在の日系人協会の機能と活動

現在、同協会は主に二つの機能をもっている。一つは日本文化行事を通して日系人が集まり、絆を深め合うことである。例えば、敬老会（毎年６月頃）、運動会（毎年８月頃）、天皇誕生日（会員祭、毎年 12 月）である。この三つの行事はほぼ会員限定である。会員は日系人協会に年会費を納める日系人に限られている。

もう一つは日本文化の普及である。例えば、日本語教育、武道、漫画（コミック）、カラオケ指導などの催しなどである。日本語教育は日系人の子弟も参加しているが、ほとんどがコロンビア人の生徒で、教師も日本で日本語を学んだコロンビア人と日系人である。この日本語教育については天理教コロンビア出張所が初期に貢献をしている。その経緯は次の通り。

1．コロンビア出張所の文化活動経緯

（ア）日系人協会の日本語学校を援助する成人向け日本語教室が昭和 52 年（1977）に信者宅を教室にして出発。その後、市内の学園などを経緯して、海外布教伝道部より「文化活動助成費」が承認され、昭和 63 年（1988）５月、市内に「天理国際文化センター」が立ち上がった。太田哲三著『コロンビアの日々』には、「この『天理国際文化センター』は、日本語だけでなく、陶芸教室、ひかり園（日系人協会の日本語幼少コース）の夏期集中講座、果ては、日系人会の役員の場所ともなり、色々な面に利用され、喜ばれた。[2]」とある。

（イ）出張所理事の手で運営された独自の文化施設「天理国際文化センター」は１年半で閉鎖、その後理事のメンバーのほとんどが日系人協会の役員であり、文化活動の担当をしていたので、日系人協会へ統合、協力することに。後日、日系人協会の「日コ交流会館」が設立された。そのスタッフの多くが天理教コロンビア出張所関係者であった。

（ウ）コロンビア出張所では、コロンビア人信者の増加により、平成２年（1990）12 月より少年会活動の一環として日本語教室が開講された。ちょうど私たち夫婦がコロンビアに所員として赴任したころである。太田は、「本部より派遣の清水美世子、山口悟、岡本孝雄の他、原澤初枝も協力。13 名から始めたこの講座も現在（おそらく 1988 ～ 1989 ころ）成人を含め約 30 名が学習している[3]」と述べている。

（エ）私がコロンビア出張所員として赴任した頃（1988 年 11 月～ 1994 年 12 月）、理事（出張所の役員）や古い信者の子弟を集めて、十数名の鼓笛隊を再結成し、日本語教育にも携わった記憶がある。

（オ）日本人移民の継承として、当初コロンビア出張所関係者が講師や場所を提供して文化活動を推進してきたが、その際「においがけ・おたすけ」の場として、天理関係の文化活動は始まったように考えられる。

2．現在の様子

現在は北部、南部と二カ所の日系人協会文化施設があり、日本語教育は言うまでもなく、武道についても柔道、剣道、空手道、合気道の授業を提供。指導者はすべてコロンビア人もしくは日系人である。

［注］

(1) コロンビア日系人協会移住 50 年史編集委員会編『コロンビア移住史　五十年の歩み』コロンビア日系人協会移住 50 年史編集委員会、1981 年、33 頁。

(2) 太田哲三『コロンビアの日々』天理大学おやさと研究所、1998 年、145 頁。

(3) 同書、147 頁。

遺跡からのメッセージ（50）

弥生時代を再考する ④ 土井ヶ浜遺跡と渡来人論

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

人種論争のミッシングリンク

モースによる大森貝塚の発掘の結果、日本列島における石器時代の存在が明らかになったが、その担い手は先住民だと考えられ、アイヌ説、コロポックル説などの学説が唱えられた。しかし研究の舞台になったのは、関東地方の貝塚が中心で、近畿地方で石器時代の研究が本格的に進むのは、ようやく大正年間になってからだった。

大正６年（1917 年）６月、ヨーロッパ留学を前年に終え、京都帝国大学に新設された考古学講座の担当となった濱田耕作氏が、現大阪府藤井寺市の国府遺跡で発掘調査を行ったのがきっかけだ。遺跡で収集された大型石器がヨーロッパの旧石器と似ていることに注目した濱田氏が、その当否を確認するため、層位学など、近代的な手法を用いた発掘調査を実施したところ、旧石器の存在こそ確認できなかったものの、思いがけず、近畿地方で初めてとなる石器時代の人骨が３体見つかったのだ。２カ月後の７月 23 日～８月 20 日頃には、東京帝国大学人類学教室の講師を務めていた鳥居龍蔵氏が、本山彦一（大阪毎日新聞社主）、岩井武俊氏（同京都支局長）とともに、唐古遺跡、国府遺跡など、畿内地方（大和、河内、和泉、紀伊）の石器時代遺跡について発掘を含めた調査を行った。国府遺跡では、濱田氏が調査を行った地点の隣接地の発掘を行い、人骨を４体発見している。一行の調査の様子は 20 数回にわたって大阪毎日新聞の紙面に掲載されるとともに、鳥居氏は、『人類学雑誌』32 巻９号（1917 年）を「有史以前の畿内」と題した特集号として、調査の成果を報告し、近畿地方の石器時代に関する重要な提言を行った。

鳥居氏の考えによれば、日本列島における有史以前の石器時代は、①アイヌの石器時代＝縄文式土器の時代、②「固有日本人」の石器時代＝弥生式土器の時代、に二区分できる。とくに、大和における調査の成果から、②「固有日本人」が用いた弥生式土器は、①「アイヌ派の土器」（縄文土器）とは無関係だが、古墳時代の土器（祝部土器）と混在することが多く、今日の日本人の祖先が用いたものだと考えられた。さらに鳥居氏は、すでに大陸でフィールド調査を重ねていて、朝鮮半島から遼東半島にかけての先史時代の石器が、弥生式土器に伴う石器と近似することに気づいていたので、②「固有日本人」と弥生式土器の文化は大陸に由来すると論じたのだ。

一方、翌年（1918 年）３月に刊行された国府遺跡の発掘調査報告で、濱田氏は、鳥居氏の発掘した人骨がアイヌに近似するとした小金井良精氏（東京帝国大学人類学教室）の説に疑問を呈しつつ、国府のような弥生式土器を伴う石器時代遺跡は、アイヌ系以外の「原日本人」の所産だと考えた。さらに濱田氏は、各地出土の弥生式土器の実測図を集成する事業に着手し、翌大正８年（1919 年）、その成果を「弥生式土器形式分類図録」として報告した。全国の弥生式土器を集成する事業は、その後、森本六爾氏の主宰する東京考古学会が引き継ぎ、会誌『考古学』を舞台に研究が進められ、森本六爾・小林行雄編『弥生式土器蒐成図録』（1938 年～ 1939 年）として結実した。その過程で、弥生式土器の時期区分が行われ、初期の弥生式土器が北部九州から近畿地方へと伝播したという理解が示されるなど、弥生文化を理解する基本的な枠組みが形成されることになる。

石器時代の人種論に関しては、国府遺跡の発掘調査をきっかけに問題に取り組んだ清野謙治氏（京都帝国大学解剖学教室）が、岡山県の津雲貝塚など、多くの貝塚（縄文時代）の発掘で得られた人骨形態の統計的研究を行い、石器時代人骨とは異なって、古墳時代の人骨は朝鮮半島のものと近く、石器時代から古墳時代の間に大陸民の混血、あるいは集団の置換が生じたと考えた。しかし、肝心の弥生式土器に伴う人骨は資料が欠落し、議論できない状態が続いていた。

土井ヶ浜遺跡の弥生人骨

戦後になり、山口県豊北町土井ヶ浜の砂丘で発見された人骨や土器片が、地元の中学校教員によって、九州大学医学部解剖学教室に届けられた。この資料が、当時、教授として着任していた金関丈夫氏の目に留まり、昭和 28 年（1953 年）～昭和 32 年（1957 年）にかけて、５次にわたって行われた発掘調査で、200 体を越える弥生時代の人骨が出土した。また昭和 30 年（1955 年）、佐賀県の三津永田遺跡でも開発に伴う甕棺墓の調査で弥生時代の人骨が見つかり、弥生時代の人骨資料が一気に充実することになる。金関氏による分析の結果、両遺跡で出土した人骨の特徴は、頭が丸く、顔は面長・扁平で、四肢骨が長く、身長も高いなど、縄文人との間に大きく明瞭な隔たりがあるというものだった。中橋孝博氏（九州大学名誉教授）によると、昭和 30 年代に金関氏が発表したこの「渡来･混血説」は、当初、必ずしも賛同が多くなかったが、その後、遺伝学的な分析も含めた諸分野の研究が進んで支持を増やし、今はすっかり定説化した。

ちなみに、昨年長逝された金関恕先生は、土井ヶ浜遺跡や三津永田遺跡の発掘当時、京都大学で考古学を専攻する学生だったが、いずれの発掘調査にも参加して、父の丈夫氏を手伝っている。本年５月、遺跡に近接する土井ヶ浜人類学ミュージアムで開催された企画展「土井ヶ浜遺跡－日本人のルーツを物語る遺跡－」では、先生の若き日の写真や、大学ノートに記された発掘日誌、発掘現場の写真などが展示され、さらには発掘作業の映像までが上映されていた。人骨研究に大きな足跡を残した金関丈夫先生は、晩年、天理市内の岩室町に居をかまえて過ごしておられたが、没後、自らが九州大学の骨格標本となられた。ご子息、恕先生も、父の遺言どおり、献体を行い、同じく骨格標本となる運命に従われた。

再現された土井ヶ浜遺跡の発掘現場

ヴァチカン便り（40）

個人主義に冒されるキリスト教徒

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

現代カソリックの問題点について、ミラノのカソリック大学マウロ・マガッティ教授とキアラ・ジャッカルディ教授に問う記事(週刊誌 *FAMIGLIA CRISITIANA* 2019 年 8 月 25 日号）を紹介する。

問い：現代人は福音書でいう「放蕩息子」のようであるが、どうしてこうなったのか。

ジャッカルディ（以下ジャとする）：それは自由という思想によるものだろう。放蕩息子は、神は父であるという概念を持つ。父は子に対して、どこかへ行ってしまえとは言わない。放蕩息子は、誰が父であるかは知っている。神は放蕩息子が帰ってくるのをいつも待っている。帰ることは祭りのような喜びであり、父と契約を更改することである。

マガッティ（以下マとする）：我々現代人は、キリスト教文化の中に育ったが、放蕩息子のように、その文化、社会から抜け出し、神の世界に戻れないでいる。失望して多くの困難の中に生きているのだ。

問い：現代人は、放蕩息子のごとく、父の家に戻りたいと思っているのか？

マ：現代の悪い点は、孤独、不十分という感覚、不平等、自然破壊などである。教会の役目は、放蕩息子の良識を呼び起こす声となることである。それは「お前は父の家にいた時どんなに素晴らしい生活をしていたのか思い出さないのか」と語りつつ、息子の帰りたいという思いを成就させることだ。カソリックと現代との間には大きな対立があるが、第二ヴァチカン公会議後は対話を生み出した。そして両者はそれぞれの長所を認め合うようになった。第二ヴァチカン公会議から 50 年が過ぎた。この間、世界は根本的に変わり、もう一つの公会議が必要だとも言えるだろう。

問い:父のもとに帰る意志が消滅した現代において教会の責任は？

マ：教会はいつも歴史とともにあり、罪人でもあるが預言者でもある。しかし、今はその役割がはっきりしないようだ。公会議後に生み出された進歩派と守旧派との間の溝を超えることだ。我々は進歩派でも守旧派でもない。現代が良きことを生み出したことも、また逆に巨大な歪みを生み出したということも知っている。法王が繰り返し言うように、生活の規範を切り替える必要がある。福音書のメッセージを信条として、生活を確立する必要がある。

ジャ：もし教会が兄であるならば「出て行くな」と言っただろう。慈悲深い父ならば、新しい契約を結ぶようにしただろう。

問い：教会は同意の信仰ではなく、保証の信仰を持つ必要があるのか？

ジャ：教会と現代人は、キリストが説いたように正逆の動きを学習する必要がある。教理は真理の確実性を伝え、これを肯定する。簡単に言えば、神を愛し、隣人を愛することだ。あとは神についていけばよい。信仰とは語源的には「綱」を意味する。自分の命をあるものに繋ぐことだ。信仰とは「つながり」であり、ある内容に同意することではない。信仰とは委ねることであり、道徳的指標ではない。

マ：信仰は信頼することであり、同時に同意することである。しかし、今日は文化的根底がすっかり変わっている。1960 年代までは、一連の個々に分断された世界に生きていた。その時は、信仰とは指示に従うことだった。しかし今日そんなことを説いたら、偏狭主義者ないしはセクト主義者に見られるだろう。教会は聖ペトロ、聖パオロの時代より、福音書の内容を広めようとした。教会は分断した世界の境界線を突破しようと努力しているのだ。

問い：近代技術は救いの効力の概念を変革した。技術時代における救済とは何なのか。

マ：教会は聖霊の助けによって、2000 年の歴史を経てきた。時間と歴史と文化とに対抗することに恐れはなかった。今日、現場の諸問題に対しては、ただ勇気を持ってことに当たるだけだ。2008 年以降、政治は大きな力を持ち、さらにそこに技術の問題が絡んできた。戦いは長い。聖書には 40 年の砂漠の歴史が書かれている。そこを忍耐で乗り越えた。現代人は技術の犠牲になろうとしている。人間が作り出す神像はすべて人間的である。これに対して正しい回答はないが、我々は正直となり、「祈り」をもって前進するしかない。

問い:政治の力と技術の力との違いは、後者が実験室の中で「生命」を創り出せるところにあるのか。

マ：両者の間に大きな進歩の違いがある。政治は技術に凌駕されてしまった。信仰に対する挑戦でもある。キリスト教右派は避妊肯定活動に反対し、左派は人道主義の立場で、移民救済活動に奔走している。両者は協力し合う必要がある。

問い：どうしたら今日の人間は、救済について魅力と説得力のある話を見出すことができるだろうか？

ジャ：今日では、救済ではなく、安全性についての話ばかりがなされる。技術で実現された安全性や制御には金がかかっている。しかし救済に関しては完全な論証だけが求められる。“saivo”（救済）というのは語源的には ”vivo”（生きる）でないが、“intero”「すべて」が “felice”「しあわせ」ということである。救済は、あの世に行く保証を得ることでなく、この世にあっても最大の喜びの生を享けることである。我々は安全性だけではなく、真の救済をも求めなければならない。

問い：ポピュリスムは個人化された人民の病気だと言われるが、教会はいかにこれと戦っていけばよいのか？

マ:ポピュリスムは、この 30 年間に起きた個人主義の反動である。ポピュリスムの代替物は世界主義ではない。問題はその中間に何があるかということだ。教会は、地球規模で繋がりを持つ数少ない組織の一つである。教会は人々を導いために、ソーシャルネットワークを使用して人々の憎しみを忘れさせ、兄弟愛の観念を構築させなければならない。

ジャ：個人というのは抽象的だ。法王フランチェスコは、個人文化ではなく、集団文化の出身だ。我々の多くは具体的に人との関係網を持っている。だからヨーロッパは幸運である。

問い：カソリックはなぜヨーロッパで危機なのか？　またどうしたら活性化できるか？

ジャ：カソリックは、個人主義と抽象的なものに囚われている。同じものの繰り返しでなく、人間学的なものを作り出すことが大切である。福音書のメッセージは生命そのもののメッセージだからである。それはキリスト教徒だけの財産だけでなく、全人類の財産なのである。

マ：教会は固く凝り固まってしまい、生身の人間に対応できなくなっている。法王パオロ 6 世は「教会は人間のエキスパート」であると言われた。今こそキリストの教え、福音書の教えを声高に唱える必要がある。過去に述べたことを繰り返すというのではなく、新しいページを開いて行くことだ。

天大生の SDGs に関する意識調査 ①

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

私は、天理大学で環境論についての講義を 20 年以上にわたって担当してきた。その間、環境問題の過去・現在・未来について、“常識”として身につけておくべき「知識」や「知恵」を、私なりに学生たちへ伝えてきたつもりである。それは、「知識」ある教員から知識ない学生への一方的な“上意下達”方式だった。

ところが、双方向コミュニケーションのツールとして SNS が普及し、どんな情報でも瞬時に入手できるようになった今日、最新情報は「知識」ある者の独占物ではなくなった。それは、学生でも素早く最新情報・関連情報を入手できるようになったことを意味する。そのことは良いことだが、真贋や是非の見極めに少々不安を抱くようになっているのも事実である。むしろ十分に咀嚼・消化されないままの状況にあることが、これからの課題ではないかと考える。

そこで今年度の授業では、環境問題に関する講義をおこなった後、学生自らが考え、咀嚼・消化できるような小グループの学生間の討論時間を初めて取り入れた。いわゆる、アクティブラーニング法の導入である。これは、自らの「知識」を「知恵」として働かせるための訓練でもある。

その経緯を把握するため、私はこの春学期試験で、4 問のうちの 1 問を、「知恵」を推し量る設問として出題した。ほかの 3 問のように、ある一定の正解を求めるのではなく、小グループに分けられた学生たちによる討論内容、すなわち止揚された「知恵」を回答させる設問だった。

設問は、国連が打ち出した「SDGs（持続可能な開発目標）」に関するものだった（図 1）。

図 1　SDGs の 17 目標。朝日新聞記事（2017 年 6 月 27 日）より。

「SDGs」とは何か？

2015 年 9 月、国連は「持続可能な開発サミット」を開催し、2030 年までの新たな目標である「SDGs」を全会一致で採択した。それは、17 の目標（図 1）と 169 のターゲットである。

この目標とターゲットが打ち出された背景には、2000 年に国連で採択した「MDGs（ミレニアム開発目標）」の存在がある。2015 年までの 15 年間、国際社会は協働で、途上国において生後 5 歳未満の乳幼児死亡者数を減少させ、多くの子どもたちを学校へ通学させられるようにした成果があったからである。一方で、貧富の格差の拡大は一層著しくなり、「MDGs」ではカバーしきれない問題が起きてきたこともその背景にあった。

今日、「SDGs」の実践は、国や地方自治体に限らず、企業や団体、個人の生き方にまで浸透し、今も拡大し続けている。国連がこれまで打ち出したアジェンダの中で、「SDGs」は最も身近に感じられる行動指針・目標になっている（表 1）。

目標 1（貧困）	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。
目標 2（飢餓）	飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。
目標 3（保健）	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。
目標 4（教育）	すべての人々への包括的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。
目標 5（ジェンダー）	ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女子のエンパワーメントを行う。
目標 6（水・衛生）	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。
目標 7（エネルギー）	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な現代的エネルギーへのアクセスを確保する。
目標 8（経済成長と雇用）	包括的かつ持続可能な経済成長、およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用とディーセント・ワーク（適切な雇用）を促進する。
目標 9（インフラ、産業化、イノベーション）	レジリエントなインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進、およびイノベーションの拡大を図る。
目標10（不平等）	各国内および各国間の不平等を是正する。
目標11（持続可能な都市）	包括的で安全かつレジリエントで持続可能な都市および人間居住を実現する。
目標12（持続可能な生産と消費）	持続可能な生産消費形態を確保する。
目標13（気候変動）	気候変動およびその影響を軽減するための緊急対策を講じる。
目標14（海洋資源）	持続可能な開発のために海洋資源を保全し、持続的に利用する。
目標15（陸上資源）	陸域生態系の保護・回復・持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・防止および生物多様性の損失の阻止を促進する。
目標16（平和）	持続可能な開発のための平和で包括的な社会の促進、すべての人々への司法へのアクセス提供、およびあらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度の構築を図る。
目標17（実施手段）	持続可能な開発のための実施手段の強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。

表 1　SDGs の 17 目標とその内容。環境省のホームページより。

「SDGs」に関する設問と回答

私が春学期試験に出題した設問は、以下のとおりである。「天理大学として『SDGs』を実践するには、どのような方法・内容が考えられるか？　具体的な事例をあげて説明しなさい」というものだった。当然この設問に対する正解は一つではない。授業で伝えた「知識」を通して、どこまで「知恵」に変えているかを狙った設問である。これは、授業中に討論した小グループ間の考え方を整理する機会でもあった。

試験は、「地球環境論」「テーマ科目 1」「自然と人間 1」の統一授業のテストとして実施した。受験者数は「地球環境論」（1 年生）201 名、「テーマ科目 1」「自然と人間 1」（2 ～ 4 年生）69 名の計 270 名だった。そのうちの回答不明・無回答の 7 名を除くと、有効回答者数は計 263 名だった。

また、当方が期待していた回答は「SDGs」17 目標（表 1）に関連する内容・項目についてだったが、それとは別の回答、すなわち天理大学に特化した独自の「SDGs」として考えられる回答（7 つの目標）が得られた。それらすべてを合わせると 24 目標となり、計 673 項目の回答となった。

得られた回答を 17 目標（図 1、表 1）にグループ分けした結果を図 2 に示すが、残りの 7 目標の結果は、次号で示す。

図示したように、17 目標内にカテゴライズされた項目数が最も多かったのは、図 1 に示す目標 12「つくる責任　つかう責任」で、103 項目（回答者）数だった。

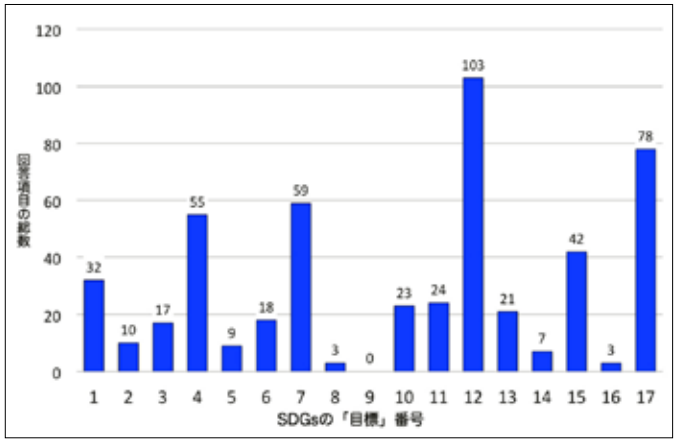

図 2　SDGs の 17 目標別に見た回答項目数。

第 324 回研究報告会（7 月 18 日）
The 16th United Nations Day of Vesak（UNDV）2019 参加報告

堀内みどり

6 月 12 日から 14 日にかけて、ハノイ（ベトナム）で開催された第 16 回 UNDV の様子を報告した。1999 年 12 月第 54 回国連総会で、「ウェーサク（Vesak）の日の国際的認知」宣言が行われ、2004 年からは仏教の盛んな国が国家的な催しとして本格的に祝っている。宣言には、「毎年 5 月の満月の日が仏教徒にとって最も聖なる日であり、仏教徒はこの日に仏陀の誕生、悟り、入滅を祝うものであることを認識し、……世界最古の宗教の一つである仏教が、過去 2000 年以上にわたって人間精神に果たしてきた貢献、そして今なお果たし続けている貢献に対する承認が与えられる」としている。Vaiśākha 月（5 月～6 月）の満月の日を中心に行われる UNDV は、ベトナムでは第 5 回（2008 年）、第 11 回（2014 年）と過去 2 回開催され、今回で 3 回目の開催となった。

会場となったベトナム仏教協会（広大な池と山々に囲まれた一帯・ハノイから車で約 1.5 時間）本堂や食堂などでは、ブッダ誕生直後の水浴を模し、ブッダ像に水を注ぐことができるようになっていた。期間中は多くの一般信者や世界中から UNDV に参加した人で会場は満杯となり、堀内が発表した研究部門だけでなく、絵画の展示や平和のための読経と灯りの奉納、花火、伝統文化や歌のショーなど、多彩なプログラムが 3 日間にわたって繰り広げられた。

開会式・閉会式では、関係各国からのお祝いのメッセージが代表者によって語られ、なかでもアフリカ仏教協会の代表は、アフリカにおける仏教の役割を情熱的に訴えた。また、開会式での国連事務総長のメッセージでは、「不寛容と不平等が増大している時代において、非暴力と他者への奉仕という仏陀のメッセージは、これまで以上に適切なものであります。」と述べられた。報告では、こうした会期中の様子を写真と共に紹介した。

「国際比較神学会議 2019（International Conference of Comparative Theology 2019）」に参加して

澤井真

2019 年 7 月 23、24 日に、オーストラリア・カトリック大学で開催された国際比較神学会議 2019 に招かれて、基調講演をおこなった。この国際会議は、宗教学者のフランシス・X・クルーニー教授（ハーバード大学）を中心として、比較神学に関心をもつ宗教研究者によって構成され、北米はもとより、パキスタン、インドネシア、シンガポールなど世界各地から、ユダヤ教徒、キリスト教徒、仏教徒、さらにイスラーム教徒など約 160 人が参加した。

1 日目は、まず、国際会議の実行委員長であるアニータ・C・レイ教授（オーストラリア・カトリック大学）が国際会議の趣旨説明をおこない、引き続いて、クルーニー教授による開会を兼ねた基調講演で開幕した。比較神学の視点から、カトリックの宗教思想とヴェーダーンタ哲学を比較しながら、自らの信仰に対する「深い学び」をめぐって講演した。その後、3 つの基調講演とともに、1 つの並行セッション（6 部会の同時開催）での研究発表が行われた。

天理教学に関する基調講演

2 日目には、3 つの基調講演と 3 つの並行セッションが行われた。筆者は 2 番目の基調講演の講師として登壇した。「天理教の教祖を慕って―より深い学びのための諸宗教の役割」（Following the Foundress of Tenrikyo: the Role of Religions for Deeper Learning）と題して講演をおこなった。その講演では、教祖を慕う白熱の信仰のなかで進められた、天理教学にとっての比較研究の意義と諸宗教の役割について考察した。

一般参加者も多数来場していたため、まず、天理教について概説した。前日に参拝の機会を得たメルボルン市内にある天理教の布教拠点、天理教メルボルン心勇教会とジョイアス甕港（おうこう）布教所の写真を交えながら、天理教を紹介した。

中山正善 2 代真柱は、親神・天理王命が教祖の口を通して伝えられた教えを、より深く理解し、誤りなく伝えるために天理教学の意義を強調された。その際に採られた視点の一つは、他宗教との比較研究を通して宗教を明らかにしようという宗教学（比較宗教学）であった。この意味で、天理教学と宗教学は「二つ一つ」の関係にあり、天理教学は比較神学的視座を内包したものとなっている。いわばクルーニー教授の言う、信仰に対する「より深い学び」（deeper learning）のために、天理教学は位置づけられるとも言えるかもしれない。

ぢばは親神が人間を初めて宿し込まれた地点であり、親神天理王命、教祖、ぢばはその理一つである。そういう意味において、ぢばの中心性は天理教において不可欠である。『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、数多くの逸話が収録されているように、先人たちはぢばの方角を拝してきた。大正・昭和普請を通して、ぢばの中心性がより明確化されたが、それは中山正善 2 代真柱が諸地域への巡教や諸宗教との比較研究をおこない、教祖の教えへの「より深い理解」に関わっていることを示唆した。最後に、筆者の研究分野である、イスラーム神秘思想における神の名に関する議論を通して、天理教の神名に込められた意味を掘り下げて考察した。

アジアにおける比較神学

会議翌日の 25 日には、「アジアにおける比較神学」と題した国際ワークショップが行われた。シンガポール、インドネシア、インド、オーストラリアなどからの参加者が、それぞれの地域の視点から、アジアにおける比較神学の可能性を論じた。筆者は「震災復興にみる信仰間理解―天理教学の視点から―」（Inter-faith Understanding in the Post-Earthquake Recovery: from the Perspective of Tenrikyo Theology）と題した研究発表をおこなった。その内容は次の通りである。

アジアのなかでも、日本はとりわけ災害が多い。天理教をはじめ、多くの諸宗教の「聖典」では、神への信仰としての「道」が説かれ、そのことで信仰と救済の絶対性が強調される。イスラームにおいても、sharīah、ṭarīqah、ṣirāṭ、sabīl などの「道」に関連する語がある。しかしながら、震災復興の現場では、そうした信仰者や非信仰者という区別なく、いわば道はすべての

人のために開かれたものとなる。天理教の災害救援ひのきしん隊の活動は、被災地域の住民たちに広く認知されている。東日本大震災後に始まった臨床宗教師の活動や、諸宗教団体による復興支援は、諸宗教が協調し合う場となっている。それは同時に、信仰間対話の場であり、「より深い学び」の場となっている。

国際会議とワークショップを終えて

オーストラリアは多くの難民や移民を受け入れている国である。アジアが多文化共生の地域であることを踏まえて考えるとき、他者の信仰に対して優劣を付けることなく積極的に学ぶことは、大きな意味をもっている。自ら進んで他者からの学びを言語化し、自らの信仰を掘り下げる比較神学は、天理教学の本来的な役割とも通底していると感じた。

2019 年度第 1 回伝道研究会（8 月 7 日）
アンゴラ・世界救世教における体験談の諸相
ーアフリカに進出した新宗教の事例としてー

ハーバード大学大学院宗教学科博士課程
三浦尚仁

2019 年 8 月 7 日に行われた伝道研究会で、私はアンゴラにおける世界救世教の活動について発表した。アンゴラ共和国における世界救世教いづのめ教団の活動をアフリカに進出した新宗教の一例として取り上げ、主に体験談の諸相について検討する内容であった。

世界救世教（以下、救世教）は大本の信徒だった岡田茂吉（1882 ～ 1955）が 1935（昭和 10）年に創立。浄霊･自然農法･芸術を活動の三本の柱とし、本部所在地は静岡県熱海市。救世教は 1955（昭和 30）年にブラジルで布教を開始、1991（平成 3）年から同じポルトガル語圏のアンゴラにおいて活動を展開した。

教団の統計によると、アンゴラでの信徒数は 2010 年までに約 60,000 人に達し、現在アフリカ大陸のうち 26 カ国における合計信者数は約 80,000 人。その大多数はアンゴラに集中し、続いてモザンビークに約 6,000 人、コンゴ民主共和国に約 3,500 人、サントメ・プリンシペ民主共和国に約 1,500 人、南アフリカに約 500 人という順である。公称の信徒数は誇張され、実際にその宗教だけを信じている「信者」という形態はごく限られているとしても、新宗教が外国人の一部に受け入れられつつある傾向があることは確かである。

2016 年 8 月から 2017 年 6 月までアンゴラで行なったフィールドワークを軸に議論が展開した。私の研究は、現在はまだ研究の初期段階ではあるが、救世教がアンゴラで信徒を獲得していく実態を、異文化布教並びに海外における日本宗教・文化の発展というテーマで、これから研究を続ける予定である。

ブラジルに進出した多くの新宗教の中でも救世教、生長の家、PL 教団、創価学会、崇教真光等は日系のエスニック・グループを超えて非日系人の間に広く浸透していった（ブラジルにおいて救世教の信徒数は 2001 年の段階で約 310,000 人とされ、そのうち 97% は非日系人である）。先行研究が示す通り、アンゴラにおいても救世教信徒の非日系人の割合は非常に高い（99%以上）。日本から直接布教を始めるケースと異なり、同じポルトガル語圏のブラジルを通して展開していった布教の流れが重要と思われる。なお、救世教のアンゴラ名は Igreja Messiânica Mundial de Angola で、メシアニカ（Messiânica）と呼称される（ブラジル同様）。

また、信仰の体験談の構成により、時間的（入信以前・入信以後）境界と空間的（教団外・教団内）境界がどのように構築され、それがいかに人々を宗教的共同体に引き寄せる効果があるのかについて議論を行った。体験談の発表を通して、信者は自らの信仰の原点を思い出し、教団布教のナラティブの文脈の一部として自身の信仰体験を捉えるよう促されていく。抽象的･外来的ともとれる様々な宗教的概念を、信徒の間で具体化･ローカライズする重要なメカニズムの一つとして体験談は機能する。体験談の実践は外国からの宗教運動（すなわちアンゴラにおける日本の新宗教）に参加する人々が言語と文化の違いを越境する一つの枠組みとなっていると思われる。

天理大学おやさと研究所
2019 年度公開教学講座

信仰に生きる
『逸話篇』に学ぶ（5）

場所：天理教道友社 6 階ホール
時間：午前 10 時～ 11 時 30 分
事前予約不要・来聴無料

第 5 回　10 月 25 日（金）　島田勝巳
71 話「あの雨の中を」
第 6 回　11 月 25 日（月）　堀内みどり
73 話「大護摩」

グローカル天理
第 20 巻　第 10 号　（通巻 238 号）
2019 年（令和元年）10 月 1 日発行
発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan
ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University